

此の薬王品の大意とは、此の薬王品は第七の巻、二十八品の中には第二十三の品なり。此の第一の巻に序品・方便品の二品有り。序品は二十八品の序なり。方便品より人記品に至るまでの八品には、正しょうには二乗作仏を明かし、傍ぼうには菩薩・凡夫の作仏を明かす。法師・宝塔・提婆・勸持・安樂の五品は、上の八品を末代の凡夫の修行すべき様を説くなり。又、涌出品は寿量品の序なり。分別功德品より十二品は、正には寿量品を末代の凡夫の行すべき様、傍には方便品等の八品を修行すべき様を説くなり。然れば此の薬王品は方便品等の八品、並びに寿量品を修行すべき様を説きし品なり。

此の品に十の喩たとへ有り。

第一は大海の譬へ。先づ第一の譬へを粗申すべし。此の南閻浮提に二千五百の河あり。西俱耶尼さいくやにに五千の河あり。総じて此の四天下に二万五千九百の河あり。或は四十里乃至百里・一里・一町・一尋等ひとひろ有るなり。然りと雖も此の諸河は総じて深淺の事大海に及ばず。法華已前の華嚴經・阿含經・方等經・般若經・深密經・阿弥陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經そしじ・密嚴經等の釈迦如来の所説の一切經、大日如来の所説の一切經、阿弥陀如来の所説の一切經、薬師如来の所説の一切經、過去・現在・未来三世の諸仏所説の一切經の中に法華經第一なり。譬へば諸經は大河・中河・小河等の如く、法華經は大海の如し等と説くなり。河に勝れたる大海に十の徳有り。一に大海は漸次に深し、河は爾しからず。二に大海は死屍ししを留めず、河は爾らず。三に大海は本の名を失ふ、河は爾らず。四に大海は一味なり、河は爾らず。五に大海は宝たから等有り、河は爾らず。六に大海は極めて深し、河は爾らず。七に大海は廣大無量なり、河は爾らず。八に大海は大身の衆生等有り、河は爾らず。九に大海は潮の増減有り、河は爾らず。十に大海は大雨大河を受けて盈溢よういつ無し、河は爾らず。

此の法華經には十の徳有り。諸經には十の失有り。此の經は漸次深多じんたにして五十展転てんでんなり。諸經には猶一も無し。況んや二・三・四乃至五十展転をや。河は深けれども大海の浅きに及ばず。諸經は一字一句十念等を以て、十悪五逆等の悪機しよくを撮すと雖も、未だ一字一句の随喜五十展転には及ばざるなり。此の經の大海に死屍ししを留めずとは、法華經に背く謗法の者は極善ごくぜんの人たりと雖も猶之を捨つ。何に況んや悪人なるの上謗法を為さん者をや。設ひ諸經を謗すと雖も法華經に背かざれば必ず仏道を成ず。設ひ一切經を信ずと雖も法華經に背かば必ず阿鼻大城に墮つ。乃至第八には大海は大身の衆生あり等と云ふは、大海には摩竭大魚等大身の衆生之まかつだいぎよ有り。無間地獄と申すは縦じゅうこう広八万由旬なり。五逆の者無間地獄に墮ちては一人必ず充滿す。此の地獄の衆生は五逆の者大身の衆生なり。諸經の小河大河の中には摩竭大魚之無し。法華經の大海には之有り。五逆の者仏道を成ず。是実には諸經に之無し。諸經に之有りと云ふと雖も実には未顕真実なり。

故に一代聖教を諳んぜし天台智者大師の釈に云はく「他經は但菩薩に記して二乗に記せず。乃至、但善に記して惡に記せず。今經は皆記す」等云云。余は且く之を略す。

第二には山に譬ふ。十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり。十宝山とは一には雪山・二には香山・三には鞞梨羅山・四には仙聖山・五には由乾陀山・六には馬耳山・七には尼民陀羅山・八には斫伽羅山・九には宿慧山・十には須弥山なり。先の九山とは諸經諸山の如し。但し一々に財あり。須弥山は衆財を具して其の財に勝れたり。例せば世間の金の閻浮檀金に及ばざるが如し。華嚴經の法界唯心・般若の十八空・大日經の五相成身・觀經の往生より、法華經の即身成仏勝れたるなり。須弥山は金色なり。一切の牛馬・人天・衆鳥等、此の山に依れば必ず本の色を失して金色なり。余山は爾らず。一切の諸經は法華經に依れば本の色を失ふ。例せば黒色の物、日月の光に値ひて色を失ふが如し。諸經の往生成仏等の色は法華經に値へば必ず其の義を無ふ。

第三には月に譬ふ。衆星は或は半里或は一里或は八里或は十六里には過ぎず。月は八百余里なり。衆星は光有りと雖も月に及ばず。設ひ百千万億乃至一四天下三千大千十方世界の衆星之を集むとも、一の月の光に及ばず。何に況んや一の星、月の光に及ぶべきや。華嚴經・阿含經・方等・般若・涅槃經・大日經・觀經等の一切の經之を集むとも法華經の一字に及ばじ。一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑、並びに十惡五逆等の業は暗夜のごとし。華嚴經等の一切經は闇夜の星のごとし。法華經は闇夜の月のごとし。法華經を信ずれども深く信ぜざる者は半月の闇夜を照らすが如し。深く信ずる者は満月の闇夜を照らすが如し。月無くして但星のみ有る夜には強力の者・かたましき者なむどは行歩すといへども、老骨の者・女人なむどは行歩に叶はず。満月の時は女人老骨なむども、或は遊宴のため、或は人に値はんが如き行歩自在なり。諸經には菩薩・大根性の凡夫は設ひ得道なるとも、二乗・凡夫・惡人・女人乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人々は往生成仏不定なり。法華經は爾らず。二乗・惡人・女人等猶仏に成る。何に況んや菩薩・大根性の凡夫をや。又月はよいよりも暁は光まさり、春夏よりも秋冬は光あり。法華經は正像二千年よりも末法には殊に利生有るべし。

問うて云はく、証文如何。答へて云はく、道理顯然なり。其の上次下の文に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に広宣流布して、閻浮提に於て断絶せしむること無し」等云云。此の經文に二千年の後、南閻浮提に広宣流布すべしととかれて候は、第三の月の譬への意なり。此の意を根本伝教大師釈して云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り。法華一乗の機今正しく是其の時なり」等云云。正法千年も像法千年も、法華經の利益は諸經に之勝るべし。然りと雖も月の光の春夏の正像二千年より末法の秋冬に至りて光の勝るが如し。

第四の譬へは日の譬へ。星の中に月の出でたるは星の光には月の光は勝るとも未だ星の光を消さず。日中には星の光消ゆるのみにあらず、又月の光も奪ひて光を失う。爾前は星の如く法華經の迹門は月の如し。寿量品は日の如し。寿量品の時は迹門の月末だ及

ばず。何に況んや爾前の星をや。夜は星の時も月の時も衆務を作さず。夜暁けて必ず衆務を作す。爾前迹門にして猶生死を離れ難し。本門寿量品に至りて必ず生死を離るべし。余の六譬之を略す。

此の外又多くの譬へ此の品に有り。其の中に「渡りに船を得たるが如し」と。此の譬への意は生死の大海には爾前の経は或はいかだ 棧 或は小船なり。生死の此の岸より生死の彼の岸には付くと雖も、生死の大海を渡り極楽の彼岸にはとづきがたし。例せば世間の小船等が筑紫より坂東に至り、鎌倉より江 島の島なむどへとづけども唐土へ至らず。唐船は必ず日本国より震旦国に至るに障り無きなり。又云はく「貧しきに宝を得たるが如し」等云云。爾前の国は貧国なり、爾前の人なほは餓鬼なり、法華経は宝山なり、人は富人なり。

問うて云はく、爾前は貧国と云ふ証文如何。答へて云はく、授記品に云はく「飢餓たる国より来たりてたちま 忽ちぜん 大王の膳あに遇へるが如し」等云云。

女人往生成仏の段。経文に云はく「若し如来の滅後、後五百歳の中に若し女人有りて是の經典を聞きて説の如く修行せば 此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏の大菩薩衆のいによう 圍遶せる住処に往きて、蓮華の中宝座の上に生ぜん」等云云。

問うて曰く、此の経此の品に殊に女人往生を説く、何の故か有るや。答へて曰く、仏意測りがたく、此の義決し難きか。但し一の料簡を加へば、女人は衆罪の根本、破国の源なり。故に内外典に多く之をいまし 禁む。其の中に外典を以て之を論ずれば三従あり。三従と申すは三つしたがふと云ふなり。一には幼にしては父母に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老いては子に従ふ。この三障有りて世間自在ならず。内典を以て之を論ずれば五障有り。五障とは一には六道輪回りんねの間男子だいぼんてんのうの如く大梵天王と作らず。二には帝釈たいしやくと作らず。三には魔王と作らず。四にはてんりんじょうおう 轉輪聖王と作らず。五には常に六道に留まりて三界を出でて仏と成らず。超日月三昧經の文なり。 銀色女経ごんじきによに云はく「三世の諸仏の眼は大地に墮落とも、法界の諸の女人は永く成仏の期無し」等云云。但し凡夫すら賢王聖人は妄語せず。はんよきといふし者は荊軻 けいかに頸をあたえ、季札 せきさつと申せし人は徐君が塚に剣をかけたとき。これ約束を違へず妄語無き故なり。何に況んや声聞・菩薩・仏をや。仏は昔凡夫にましましゝ時、小乗経を習ひ給ひし時、五戒を受け始め給ひき。五戒の中の第四の不妄語の戒を固く持ち給ひき。財を奪はれ、命をほろぼされし時も此の戒をやぶらず。大乘経を習ひ給ひし時、又十重禁戒じゅうじゅうきんかいを持ち、其の十重禁戒の中の第四の不妄語戒を持ち給ひき。此の戒を堅く持ちて無量劫之を破りたまはず。終に此の戒の力に依りて仏身を成じ、三十二相の中に薄 広長覆の相を得たまへり。此の舌うすく、ひろく、ながし。或は面にをい、或は髪際ほっさいにいたり、或は梵天えにいたる。舌の上に五の画あり。印文のごとし。其の舌の色はしゃくどう 赤銅のごとし。舌の下に二の珠たまあり。甘露ゆじゆつを涌出す。此不妄語戒の徳の至れるなり。仏此の舌を以て、三世の諸仏の御眼まなこを大地に墮すとも、法界の女人は仏になるべからずととかれしかば、一切の女人はいかなる世にも仏には成 ならせ給ふまじきとこそお

ばへて候へ。さるにては女人の御身を受けさせ給ひては、設ひき^后さき^三さん^后ごうの位にそなはりてもな^何にかはすべき。善根仏事をなしてもよ^由しなしとこそおぼへ候へ。

而るを此の法華經の藥王品に女人往生をゆるされ候ひぬる事、又不思議に候。彼の經の妄語か、此の經の妄語か、いかにも一方は妄語たるべきか。若し又一方妄語ならば一仏に二言あり。信じ難き事なり。但し無量義經の「四十余年には未だ眞實を顯はさず」。涅槃經の「如来には虚妄^{こも}の言無しと雖も、若し衆生、虚妄の説に因ると知るしめす」の文を以て之を思へば、仏は女人は往生成仏すべからずと説かせ給ひけるは妄語と聞こえたり。妙法華經の文に「世尊の法は久しくして後に^{かな}要^らず当に眞實を説きたまふべし」。「妙法華經乃至皆是眞實」と申す文を以て之を思ふには、女人の往生成仏決定と説かるゝ法華經の文は実語不妄語戒と見えたり。世間の賢人も但一人ある子が不思議なる時、或は矢の有る時は永く子たるべからざるの^{ことわり}理、起請を書き或は誓言を立つとも、終に命終の時に臨んで之を許す。然りと雖も賢人に非ずとは云はず。又妄語せし者とも云はず。仏も亦復是くの如し。爾前四十余年が間は菩薩の得道・凡夫の得道・善人男子等の得道は許すやうなれども、二乗・悪人・女人などの得道は此許されず。或は又許さるゝににたる事もあり。いまだ定めがたかりしを、仏の説教四十二年すでにすぎて、御年七十二、^{まかだ}摩竭提^ぎ国王^ぎ舎城^ぎ耆^ぎ舎^ぎ崛^ぎ山と申す山にして法華經をとかせ給ふとをぼせし時、先づ無量義經と申せし經を説かせ給ふ。無量義經の文に云はく四十余年未顯眞實等云云。

日 蓮 花 押